先導的人文学・社会科学研究推進事業 観客と共創する芸術ー光・音・身体の共振の社会学的・芸術学的・工学的研究

色彩 × 日本的感性 × メディア

本シンポジウムは，色彩，日本的感性，メディアという異分野をかけあわせ，領域横断的に考察する場を提供する．今，何が争点で，何がホットなのか――参加者は人文系研究者，理系研究者，アーティストなど多分野にまたがり，自身が今争点と思うことをそれぞれに究明していくだろう．その興味の矛先の多様性が，現代社会の問題の複雑さを浮き彫りにする．その意味で，このシンポジウムが目指すところは，結論に帰結することではない．ここからスタートすることである．ここからわれわれ現代人，そしてわれわれ日本人の問題が始まる――そういう話し合いを目指していく．

シンポジウム・オーガナイザー 加藤 有希子

國本 学史

慶應義塾大学文学部／通信教育部 非常勤講師

慶應義塾大学大学院文学研究科美学美術史学専攻，後期博士（博士）課程単位取得退学．東京工芸大学，共立女子大学，お茶の水女子大学等での非常勤講師，日本学術振興会特別研究員，慶應義塾大学アート・センター ARCMA プロジェクトマネージャ等，を経て現職．日本の色彩材料の歴史，日本の色名の変遷，色彩論の日本での受容や展開等について研究．

吉澤 陽介

木更津工業高等専門学校 准教授（情報工学科：メディアデザイン研究室）

長野県長野市生まれ．2010 年博士（工学，千葉大学）．日産自動車（株），千葉大学などを経て現職．視覚伝達デザイン・情報工学・人間工学の境界分野における研究・制作活動を行なっている．特に，JIS 慣用色名の価値を定量評価することに力を入れている．日本色彩学会，日本デザイン学会，長野県デザイン振興協会などに所属．

児玉 幸子

アーティスト／電気通信大学 准教授

筑波大学芸術学研究科修了，博士（芸術学）．漆黒の液体（磁性流体）による有機的でダイナミックな動きをテーマにした作品を発表．代表作「呼吸するカオス」，「突き出す，流れる」など．現象のデザイン，芸術創造のための道具を作ることから初めて，変化する形・色彩・空間と視覚・身体の関係性を探求．

加藤 有希子

埼玉大学基盤教育研究センター 准教授

専門は近現代美術史，表象文化論，色彩論．米国デューク大学美術史表象文化学科で博士号取得．2012 年より現職．主な単著に『新印象派のプラグマティズム』（三元社，2012 年），『カラーセラピーと高度消費社会の信仰』（サンガ，2015 年），共著に「ライリーとスーラ，日本的あるいは生命と非生命のあいだで」（DIC 川村記念美術館『ゆらぎ　ブリジット・ライリーの絵画』，2018 年）などがある．

井口 壽乃

埼玉大学人文社会科学研究科 教授／副学長

専門はデザイン史，映像論．博士（芸術学）．20 世紀芸術における技術およびメディアとの融合の観点から，メディアアートに関する研究を行っている．主な著書に『ハンガリー・アヴァンギャルド：MA とモホイ＝ナジ』（彩流社，2000 年），『西洋美術の歴史 8 ：20 世紀』（中央公論新社，2017 年）など．

長谷川 紫穂

先導的人文学・社会科学研究推進プロジェクト 研究員

専門は近現代芸術論，芸術とサイエンス／テクノロジーの関連について研究を進める．主な論文に「初期メディアアートにみるインタフェース・デザイン：芸術表現としてのインタラクション空間構造についての考察」（『デザイン史学』第 12 号，2014 年），「ビデオ情報としての「美術の現状」―― VIC の記録にみる作品とその前後」（『KUAC Cinematheque 1：ビデオはおもちゃだ！VIC #1』2017 年）など．